

# 曆

第一号

平成二十年八月発行 醍醐志万子

何のため飲む薬かとわが問うに現状維持とそつけ  
もあらず

私ほど数に弱いものはない。二十歳年下の弟の年は承  
知していたが、自分自身に關しては三十歳上と考えてい  
た。万事にわたってである。恥ずかしいかぎり。今回は

恥をかいても私一人にとどめたい。  
玉城さんの作品評を拝見していいよいよむずかしくな  
った。

玉城さんの作品評を拝見していいよいよむずかしくな  
った。

## 生を呼ぶ

大雨のあとのあとの日午後よりの日ざしは及ぶわが  
足もとに

何の木の枝とも知らず桜咲く下にひろいぬ枯れたる  
枝を

木々のうえ横一線を引く雲のくれないのいろ忘れ  
ずあらん

垣に咲くくれないのバラいつの間に咲きしとも  
なく年明けており

あひる三羽一羽小さし池岸のわれらのもとにたち  
まち寄り来

白菜をちぎりて鍋に入れてゆく白菜の香はわが生  
を呼ぶ

あたたかくなればなればと言いくるる車椅子押し  
れどこまで行かん

## 働きて来し者の歌

わがいのち運びてゆけるたくましきこの男らに幸いのあれ

あんなこともありしよそのあんなことが思い出されず昨日のことも

ねむり薬のみて唱うる牧水の歌白秋のうた山河ゆくと

なにゆえにのめる薬か八十を過ぎて生きなおも足らぬというごと

郁夫・Hと赤き花を壁に見て今日は何日火曜日かとも

よき人のよき死迎うるともしもよわれはつくづく  
やさしからざり

このあたり桜は高く高く立ついちめん空のにび  
色のなか

五日後か十日のちかぜにかねをかけて生かさる  
笑止千万

すっぱりと切りたる髪はいづくにか運び去られぬ  
白きわが髪

窓わくに雀が来るよみずからを養い生くることり  
に拍手

## 照葉の森

照葉の森に氏神のおはすとぞ八社大神たいじんと鳥居に

掲ぐ

八社神社の謂れは知らず八社とふ語感嘉して賽錢  
を上ぐ

真言の古刹は扉を閉ざしをり花持ちちて墓地に入り  
ゆく人

印旛沼の水の汚れを聞きにつつ吉植庄亮のことも  
思わる

この町の歴史あれこれ言い立てて楽しむに似つ  
移住者のわれ

井野の森とその名に残る森かげの道を曲がりて  
いよいよ冷ゆる

遠くよりお辞儀をくるる人のあり閑東住まひの  
一年を過ぐ

いずこより来りてここに住む人か「こんにちは」  
とはよろしき言葉

雀ごは居るものとしてとなり家の屋根に来てをり  
朝日目覚むれば

畑土に一つ横たふ冬瓜を降りはじめたる雨の濡ら  
しぬ

『短歌現代』二〇〇八年一月号より転載)

佐倉  
常磐木や冬されまさらる城の跡  
(「寒山落木」巻三自筆稿)

明治の時代思潮を体現し、俳句・小説・文芸評論・写生画などに活躍した 正岡子規 (一八六七—一九〇二)は、一八九四年(明治二十七年)本所—佐倉間に開通した総武鉄道に初乗りして佐倉の地を訪れている。

その時の模様は当時の新聞「日本」(十二月三十日号)に詳しいが、この句はその時詠んだものであり、写生文の創始者として郊外写生の真髓をよく伝えている。  
この時すでに子規は病気がちであり、その非痛も感じられる。

子規は佐倉ゆかりの人間国宝香取秀真、洋画家の浅井忠とも深いつながりがあり、フランス留学から帰国した浅井忠は近くに住んで互いに敬愛した仲であった。  
佐倉にはこの他、国鉄佐倉駅前城南橋付近

「霜枯の左」

### あとがき

○上の写真はこの春、妹・弟と桜を觀に佐倉城址公園へ出かけた折に城内で出会った子規の句碑の説明文である。

常磐木や冬されまさらる城の跡

○読み返したら色も香もない、そっけない歌が並んでいる。これが私なら仕方ない。人間の生身というもののはまことにあたたかく、心地よいものと痛感した。

佐倉花火大会の日  
八月二日

発行所 〒二八五〇八五七  
千葉県佐倉市宮ノ台三二一五二〇六  
醍醐 志万子